

# タラ条件文の日中対訳体系のビジュアル化<sup>1</sup> —現代小説 100 編でのタラ条件文 1000 例を中心に—

李 光赫<sup>2</sup>

趙 海城<sup>3</sup>

DOI: 10.18999/stul.34.149

**要旨:** 本稿はタラ条件文の日中対訳傾向を統計分析で可視化した体系図を作ることを目指した研究である。つまり、日本の現代小説 100 編とその中国語訳本からタラ条件文 1000 例とそれに対応する中国語訳 1000 例を対象に、タラ条件文の七つの意味分類とそれに対応する中国語訳 13 パターンの対応関係を、ネットワーク分析とコレスポネンス分析によりビジュアル化した。その上で、この二つの情報を併せた体系図を作成した。本稿の意義は以下の二点にまとめることができる。(1) 中国語訳の立場からは、I～VIIのタラの意味分類が六グループに分かれていて、グループごとに中国語訳の傾向が明らかになり、日本語教育と日中翻訳研究に役立つ。(2) 前節と後節を事実・仮定の立場から A・C・D と三分類できることで条件文の論理関係を教えるのに役立つ。

**キーワード:** タラ条件文, 意味分類, 日中対訳, ビジュアル化

---

<sup>1</sup> English Title: Visualization of Japanese-Chinese parallel translation system of *tara* conditional sentence—Focusing on 1000 *tara* conditional sentences from 100 modern novels

<sup>2</sup> LI, Guanghe, Associate professor, School of foreign languages, Dalian University of technology, Dalian, China, E-mail: liguanghe5588@outlook.com.

<sup>3</sup> ZHAO, Haicheng, Associate professor, School of Humanities, Meisei University, Tokyo, Japan, E-mail: zhcyj@ge.meisei-u.ac.jp.

## 1. はじめに

膠着語である日本語と孤立語である中国語は文法的・意味的に一対一に対応するものではない。それは日中両言語の対照研究がなかなか進まない主な原因の一つでもある。日中対照研究の最終目的は日本語教育と日中翻訳への応用であると言えよう。近年、機械翻訳の技術進歩により、対照研究の理論なしでも十分に翻訳ができるようになってきている。とはいえ、中国人向け日本語教育への応用にはまだ日中対照研究が必要であり、その対照研究のためにも日中両言語がどのように対応するかを調べる基礎研究は必須である。

本稿では、日本語のタラ条件文とそれに対応する中国語表現を対象に、ネットワーク分析とコレスポネンス分析を行い、両者の対応関係のビジュアル化した体系図を作ることを試みる。

## 2. 先行研究

### 2.1 タラ条件文の意味用法

タラ条件文の意味用法は複文研究の一環として従来多く研究されてきたが、その代表的なものには蓮沼ほか(2001)、日本語記述文法研究会(2008)、前田(2009)などが挙げられる。蓮沼ほか(2001)ではタラ条件文の意味を、「A. 仮定状況の設定, B. 行為成立の状況設定, C. 前件事実文, D. 反事実文, E. 発見の状況, F. きっかけ」に六分類している。日本語記述文法研究会(2008)会では、タラ条件文を「①仮定条件文, ②反事実条件文, ③反復条件文, ④事実条件文」と四分類にしている。前田(2009)ではタラ条件文の意味を、まず「仮定条件・非仮定条件」に分けた上で、そのうちの非仮定的条件をさらに「a. 動作の連続, b. きっかけ, c. 発見, d. 発現」といった四分類にしている。

以上の研究を踏まえて、本稿ではタラの意味分類を「Ⅰ[発見], Ⅱ[契機], Ⅲ[習慣], Ⅳ[状況], Ⅴ[p 事実], Ⅵ[仮定], Ⅶ[反事実]」の七つにした。

ここには少し注釈が必要で、[契機]は上記の研究での「きっかけ」にあたる。[状況]は「行為成立の状況設定」の略語であり、[p 事実]は前件事実文のことである。また、前田(2009)で分けている「動作の連続」と「きっかけ」の違いについては、日本語母語話者でも区別しにくいこともあって、本稿ではその微妙な相違を区別せずに併せて[契機]とする。さらに、従来の研究での「発現」を表すテイタラ形式は中国語での訳し方が少し異なるため、本稿で

は考察対象とせず、別の機会に論じることとする。

## 2.2 タラ条件文についての日中対照研究

タラ条件文についての日中対照研究には、鄒・李(2014)、李・鄒(2016)などが挙げられる。

鄒・李(2014)では対訳コーパスにおける対訳例のパーセンテージからタラ形式の使用傾向と翻訳傾向を分析したが、「假定状況」が51.5%であることから「假定状況」はタラ形式のメイン用法としたうえで、中国語訳の傾向を探ってみた。その結果、中国語訳では無標文と“如果(要是), 就”がそれぞれ40.7%, 25.5%であることから、“如果(要是), 就”がタラ条件文の全体的な意味に一番近い形式だとしている。このような対訳傾向をパーセンテージで示した上で分析する手法は従来よく取られているものであるが、非定量的で、パーセンテージに見られる違いが拡大解釈されることもあるため、関数的計量方法で分析を進める必要がある。

李・鄒(2016)では、40編の小説を対象に関数検定の立場から計量的に考察しているが、40編の日本の作品のうち、23編は北京日本学研究中心編の「日中対訳コーパス」からのものであり、その大半は著作権が切れており、50年以上前の作品となるため、それらの作品の中で使われているタラの用法は現代日本語と違う可能性がある。また、タラの分類においても、当研究はWH疑問詞を用いるタラ形式の翻訳方法を別分類とせず、すべて「假定表現」として統計している。今回の対訳例データにはWH疑問詞を用いるタラ形式を一切入れていない。それはWH疑問詞タラ形式の翻訳傾向はト・バ・ナラ形式と一括して別の機会に考察する必要があるからである。

## 2.3 本稿におけるタラ条件文の意味分類

ここでは本稿におけるタラの意味七分類「I[発見], II[契機], III[習慣], IV[状況], V[p事実], VI[假定], VII[反事実]」のそれぞれの意味と用法について簡単に述べる。

### I [発見(発見の状況)]

「p(動作)がきっかけとなって、q(状態)を発見した」といった意味を表す文である。発見を表すタラ形式の後節は、中国語では知覚動詞“见到, 看到, 觉得, 感到, 发现, 出现, 闻到”などを用いて表す場合が多い。

(1) 見てない。わからない。気づいたら、上村が肩をゆさぶってた。／没看到，我不清楚。  
等我恢复意识的时候，就发现上村你在摇我肩膀。

(乙一 著/王华懋 译《天帝妖狐》)

(2) とても上手なティンパニだと思ってよくよく顔を見たら、なんと天吾くんだった。／我  
想，这定音鼓演奏得真好。仔细一看，真是天吾。

(村上春樹 著／施小炜 译《1Q84 BOOK-1》)

## II [契機(きっかけ)]

「契機(前件が後件の契機になる状況)」を表す用法で、前で取り上げた発見の用法と非常に似ているように見えるが、「発見」とは本質的な違いがある。「契機」の用法は前件が後件のきっかけ・原因となるため、タラをカラ・ノデ・タメに置き換えても問題なく言える場合が多いが(3)、発見の用法ではそれができない((4) = (1)再掲)。

(3) 太郎が殴ったら(／たため)、次郎は泣き出した。 (自作例)

(4) 見てない。わからない。気づいたら(／\*たため)、上村が肩をゆさぶってた。

異なる動作主の動作・出来事を表すタラは、過去の出来事をつないで p が q のきっかけ・原因となることを表す場合である。この場合は p と q の主語は異なり、また q には話し手以外の動作や出来事が来る。このような契機を表す用法は中国語では普通“(一)p, 就 q”などで表す(5, 6)。

(5) 餌をやったら、犬は喜んで食べた。／一喂食，狗就欢快地吃了。

(6) 電気をついたら、明るくなった。／一开灯，屋里就亮了。

(蓮沼昭子ほか:2001／筆者訳)

## III [習慣(一般的・習慣)]

[習慣]を表すタラの用法は日本語記述文法研究会(2008)で取り上げた「反復条件(反復・習慣)」に相当するものであり、「現在も続く習慣」、「過去の習慣」、「一般的用法」に分けることができるが、「現在も続く習慣」の用法はよく「いつも／必ず／よく／ときどき／たまに

／普段は」などの語と共起し、「過去の習慣」の用法は文末に「していた／したものだ／してくれた」のような形式がよく現れる。本稿ではこれらの用法と「一般的用法」を全部合わせて「習慣」と呼ぶ。

(7) 普段は昼ご飯を食べたら昼寝をしますが、今日は買い物に行かなければなりません。

／平常我吃了午饭就睡一会儿午觉，可是今天得去买东西。

(『日本語文型辞書(中国語版)』)

(8) 大学生の時はいつも朝起きたらジョギングをしたものだ。／大学时代，我总是早上起床之后就跑去跑步。

(自作例／筆者訳)

(9) ここは冬になったら、雪が1メートルぐらいつもる。／这里每一到冬天就要积一米多厚的雪。

(『日本語文型辞書(中国語版)』)

#### IV[状況]

「状況」は、蓮沼ほか(2001)でいうタラの「行為成立状況設定」の用法である。「状況」の用法は、前件が仮定で後件では命令・依頼・禁止・義務などの当為表現が現れることが多い。中国語では普通“要是 p, (就)q”か“p(之)后, q”で表す(10, 11)。

(10) おなか为空いたら、声を掛けてね。／要是饿了的话，跟我说一声啊。

(自作例／筆者訳)

(11) あもう、僕はソウマという者ですけど、藻奈美さんがお帰りになったら、電話があったことだけお伝え願えますか。／那，我的名字叫相马。藻奈美同学回来后，您能告诉她我打过电话了吗？

(東野圭吾 著／章程 译《秘密》)

#### V[p 事実]

「p 事実」は前件が事実文である仮定文のことであり、「前件 p が会話の時点で既に成り立っている状況で、q はそれに基づく判断である」場合であり、前件には具体的な状況を表す「これだけ／そんなに／あれほど」などが現れる。

(12) そんなにたくさん飲んだら、後でお腹が痛くなるよ。／那样狂喝的话，过后脑袋会疼的。

(蓮沼昭子ほか:2001／筆者訳)

(13) こうなったら 覚悟を決めるほかはない。/这样的话, 无论如何得下定决心。

(自作例/筆者訳)

## VI[仮定]

「仮定」は「仮定状況設定」のことで、前件が後件成立の条件で、p という状況を仮定した場合に起こりうる結果を q で表す用法である。このような用法は中国語では“如果 p 的话, q”などで表す(14)。

(14) この道をまっすぐ行ったら, 左手に小学校が見えます。/沿着这条路一直走的话, 左手边有一所小学。

(自作例/筆者訳)

(15) 「それにしてもさ、おれたちが叔父さんたちを助けそこねたら, やはりこのまま一生、兇悪殺人犯ってことにされてしまうのかな」/就算是这样好了, 我们如果无法救出姑丈他们, 这辈子恐怕就要被冠上凶恶杀人犯的罪名了。”

(田中芳樹 著/汪正球 译《创龙传(1)》)

## VII[反事実]

「反事実」は「反事実仮定」のことであり、既に成り立っている事態に反する結果を予想する表現である。前件が現在の状況或いは過去の事実と明らかに違う場合の仮定文である。中国語では反事実仮定を表す専用形式として“要不是 p, (就)q”がある。つまり、テンスと深い関連性を持っており、過去・現在・未来の視点から以下の三つのパターンに分けることができる。

1. [(p: 現在の事実)に反する]タラ(q: p から予想される結果)]
2. [(p: 過去の事実)に反する]タラ(q: 予想される今の結果とは異なる結果)]
3. [(p: 過去の事実)に反する]タラ(q: 現在・未来におこる可能性のある出来事)]

次の(16)～(18)はそれぞれ上記の三パターンの例である。

(16) 財布を覗いて、片山は青くなった。千円札一枚しか入っていない！「おい、運ちゃん、悪いけど東中野に寄ってくれないか」「方向が逆ですよ」「急用なんだよ」運転手

は渋々肯いた。片山が金を持っていないと知たら、喜んでUターンしたに違いない。／望望钱包，片山脸都白了。里面只有一张千圆钞票！“喂，司机，麻烦你转去东中野。”“方向相反哦。”“有急事嘛。”司机不情不愿地点点头。假如他知道片山没带钱，肯定欢欢喜喜地掉头。

(赤川次郎 著／林思孟 译《三色猫恐怖馆》)

(17)もっと注意して操作していたら，こんな事故は起こさなかった。／如果更加小心一点去操作的话，就不会发生这样的事故了。(蓮沼昭子ほか:2001／筆者訳)

(18)あとき、赤羽がおれよりタッチの差で少し前に行かなかつたら，おれは今ごろは確実に殺人者として法の裁きを受けていたことだろう。／要不是那时候赤羽比我先到几秒钟，我现在一定成为杀人犯，接受法律的制裁。

(森村誠一 著／譚必嘉 译《新干线谋杀案》)

### 3. タラ形式の意味用法とその対訳傾向

#### 3.1 分析対象

2.2 節で述べた問題点を踏まえて、本稿では 1980 年代以降の日本現代小説 100 編から、一編ごとにタラ条件文をランダム(自作コーパスソフトのランダム検索機能による)に 10 例ずつ選び出し、タラ条件形式 1000 例とそれに対応する中国語訳をペアにして統計を行う。なお、本稿では、裸の本動詞に付くタラ形式のみを対象にしており、「ている/てくれる、れる/られる、せる/させる、終わる/終える/済む」などの補助動詞、助動詞、複合動詞後項に付くタラ形式は含まれていない。それは、これらの形式に付くタラの中国語訳は翻訳の仕方が異なる場合もあるからである。

本論でいう日本現代小説 100 編とは、村上春樹 10 編、田中芳樹 20 編、赤川次郎 10 編、東野圭吾 20 編、森村誠一 10 編、乙一 10 編、貴志祐介 4 編、西村京太郎 4 編、渡辺淳一、山崎豊子、乙武洋匡、内田康夫、その他直木賞受賞作品、純文学小説、SF 小説、ホラー小説、推理小説などである。

#### 3.2 タラ形式の意味用法分布と対訳傾向

現代小説から抽出したタラ条件文 1000 例の中国語訳のパターンを整理した結果は次の表1のようになる。ただし、モシと共起するタラ形式は中国語でほぼすべてが“如果(就)”類

に訳される傾向があるので、上記の 1000 例にはモシ類と共起するタラ例は含まれていない。中国語訳パターンは様々な種類が見られたが、意味と形式を基に整理すると 13 パターンになる。

表 1:タラ形式日中対訳例対応例数

タラ 1000 例	一 発見	二 契機	三 習慣	四 状況	五 p 事実	六 仮定	七 反事実	合計
①知覚	21	0	0	0	0	0	0	21
②(一)就	6	5	7	32	2	51	4	107
③(之)后	5	4	0	56	1	16	0	82
④时(候)	19	1	4	14	0	8	0	46
⑤既然	0	0	0	1	13	0	0	14
⑥如果(就)	0	2	3	78	3	153	27	266
⑦如果-的话	0	0	0	19	1	67	24	111
⑧的话	0	0	3	19	4	31	1	58
⑨一旦(就)	1	0	0	1	1	26	0	29
⑩如果-不	0	0	0	4	0	7	27	38
⑪否则	0	0	0	0	0	3	4	7
⑫要不是	0	0	0	0	0	0	4	4
⑬无标	34	16	6	67	17	72	5	217
合計	86	28	23	291	42	434	96	1000

中国語訳 13 パターン:

- ①[知覚]:前節に“一看/只看”か、後節に“见到, 看到, 觉得, 感到, 发现, 出现, 显出, 表情变得”等が現れる文。
- ②[(一)就]:“一 p, 就 q”, “一 p, q”, “p, 就 q”などの文, 文末に“了”が付く場合もあるが, 区別せずに[一 p, 就 q]で表す。
- ③[(之)后]:前節に“后/以后/之后”か、後節に“然后/而后”等が現れる文。



- ④[时(候)]:“(正在/在)p 时(候), q”, “p, 就在这时 q”, “(每当/当)p 时, q”等が現れる文。
- ⑤[既然]:“既然 p, (就)q”, “既然如此, q”等が現れる文。
- ⑥[如果(就)]:仮定を表す副詞“要是/万一/如果(是)/如/假如/倘若/若”が現れる文。
- ⑦[如果+的话]:仮定を表す副詞“要是/万一/如果(是)/如/假如/倘若/若”等に“的话”が付く文。
- ⑧[的话]:“p 的话, q”, “p 的话, 就 q”等の形式が現れる文。
- ⑨[一旦, 就]:“一旦 p, 就 q”, “一旦 p, q”等の形式が現れる文。
- ⑩[如果+不]:“如果+不 p(的话), (就)q”, “如果+没 p(的话), (就)q”等の形式が現れる文。
- ⑪[否则(没有)]:“否则, 早就 q”, “否则, 也不会 q 到了”, “没有 p 的话, 很可能就是 q 了”等が現れる文。
- ⑫[要不是]:“要不是 p, (就)q”が現れる文。
- ⑬[无标]:関連副詞もしくは関連詞を一切使わないで表す文, 本稿では[p, q]で表す。

表 1 から見るとタラ形式の反事実仮定文は全部で 96 例あり, そのうち 4 例が“要不是”で訳されている。4 例しかない“要不是”はすべて反事実仮定文の翻訳である。中国語における“要不是”反事実仮定を表す専用形式と言えよう。

タラ形式の「発見」は, 全部で 86 例のうち, 21 例が“知觉动词”で訳されているのに対してその“知觉动词”の 21 例すべてが「発見」の翻訳であることが表 1 からわかる。つまりタラ形式を“知觉动词”で翻訳できるならそれは必ず「発見」のタラであると言えるだろう。

## 4. ネットワーク分析とコレスポネンス分析

### 4.1 共起ネットワーク分析

KH Coder 3 のコレスポネンス分析で日本語及びほかの単一言語の文章を分析した研究は数多くあるが, 日本語と他の言語との対訳データ間の対応状況を分析した研究は管見の限り見当たらない。李・趙(2018)ではタラ条件文の対訳例を対象に T・MI スコアから日中対訳の強度を分析したが, T・MI スコアだけではネットワーク分析のようなタラ形式の意味におけるグループ分けができない。そこでまずタラ条件文の対訳データをネットワーク分析でグループ分けしてみる。

本稿における共起ネットワーク分析は 1000 例のタラ条件文とそれに対応する中国語訳を

1000 ペアの日中対訳例とする。例えば, (19)は日中対訳のペアであるが, 日本語原文とその訳文を一つの文章と見なした場合, 前件が日本語原文, 後件が中国語訳文であり, 即ち前件は中心語が現れた文, 後件は共起語が現れた文になる。そうすると前件である日本語原文(19a)がタラの意味分類として[VII反事実]であり, 後件である(19b)が中国語訳パターン“⑫要不是”である。つまり, この日中対訳ペアの(19)を中心語である[VII反事実]と中国語の“⑫要不是”が共起した文と見なすことができる(20)。

(19)a.あ のとき, 赤羽が おれより タッチの 差で 少し 前に行か なかったら, おれは 今ごろは 確実に 殺人者として 法の 裁きを受 けていた ことだろ う。/b.要不是 那時候 赤羽比 我 先到 几秒 钟, 我 现在 一定 成为 杀人 犯, 接 受法 律的 制裁。

(森村誠一『新幹線殺人事件』/譚必嘉 译《新干线谋杀案》)

(20) (19a)前件 [VII反事実], (19b)後件 “⑫要不是”。

(中心語)

(共起語)

こういった考え方(日本語意味分類が中心語で, 中国語訳パターンが共起語である)で 1000 ペアの日中対訳例の対訳関係を統計したものが前掲の表1である。

本稿の主要目的は日中対訳関係のグループ分けである。それで中心語(日本語意味分類)と共起語(中国語訳パターン)の立場から表1のデータを用いて共起ネットワーク分析をした。つまり, 下記の図1はタラ形式の対訳データを共起ネットワーク分析した(Euclid距離)ものであり, 共起関連度が高いものが線で結ばれている。実線で結ばれているものは同じ色で同一グループになっている。

タラの意味用法を7分類しているにも関わらず, 共起ネットワーク分析を行った結果, 図1に示されるように, 6つのグループに分けられており, 「発見」と「契機」が一つのグループに分類されている。

I [発見]+ II [契機]   III [習慣]   IV [状況]   V [p 事実]   VI [仮定]   VII [反事実]

日本語からすると, 「発見」と「契機」は文法的特徴として少し異なっているが, 中国語母語話者からすると, この二つの意味用法が極めて近く, 区別し難いと言えるかもしれない。と言えよう。次の(20), (21)のように「発見」は「p 動作, q 状態」で, 「契機」は「p 動作, q 動

作]であるのに対して、中国語ではどちらも「p 動作, q 動作」で表すからである。

(20) 部屋に入ると父が倒れていた。／一进屋, 就发现父亲倒在地上了。(発見)

(21) 太郎が殴ったら次郎は泣き出した。／太郎一动手, 次郎就哭出来了。(契機)

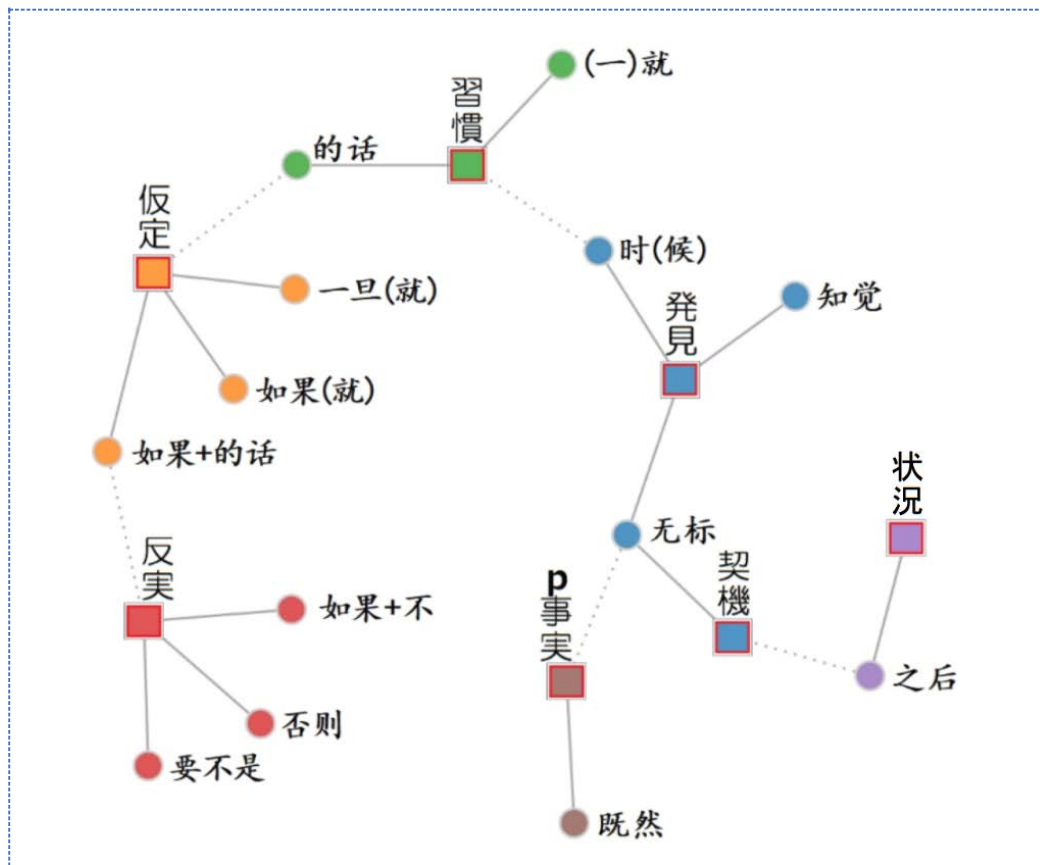


図 1: タラ形式日中対訳例の共起ネットワーク図

こういった点からすると、タラ条件文の「発見」と「契機」の用法は中国人日本語学習者にとって分かりにくい用法であるといえるだろう。日本語非母語話者、特に中国人日本語学習者への日本語教育の現場では注意を払って指導する必要がある。

共起ネットワーク分析は日中対訳関係のグループ分けをしているにすぎず、教育現場ではこれだけでは論理的に日本語を教えるのは難しい。

図 1 からタラ形式の意味分類とそれに対応する中国語訳が一目瞭然であり、中国語母語話者の日本語教育に役立つと言えるものの、従来の日本語教育教科書、日本語教育現場ではタラ形式を次の表 2 のように、前件が事実・假定、後件が事実・予想に分けて教えてき

た。つまり、従来のような論理的な日本語の教え方からすると、KH Coder で作った共起ネットワーク分析図だけでは実際の教育現場で応用しにくいといった問題点が出てくる。

表 2:「事実・仮定(予想)」からみたタラ形式の分類

	q 予想	q 事実
p 仮定	A:[p 仮定, q 予想]=仮定文	B: <del>[p 仮定, q 事実]</del> =存在しない
p 事実	C:[p 事実, q 予想]=仮定文	D:[p 事実, q 事実]=事実文

## 4.2 コレスポネンス分析

共起ネットワーク分析は日中対訳関係のグループ分けをただけであり、前節で取り上げた問題点を解決するには、言語の論理体系のカテゴリー化と図 1 が結合したものが必要となる。

そのため、本節では言語の論理体系のカテゴリー化を目的にコレスポネンス分析<sup>4</sup>を試みる。つまり、IBM SPSS Statistics 25 でコレスポネンス分析をしてタラ形式の意味分類とその対訳関係のカテゴリー分類を試みる。

表 1 のデータを元にコレスポネンス分析で対訳関係を描くと図 2 のようになるが、コレスポネンス分析の主な目的は「データの合成や分解ではなく、カテゴリーの整理と分類そのものにある」(石川ほか 2010)。図 2 も表 2 と同じく A・C・D 三つのカテゴリーにはっきりと分かれていることがわかる。原点近くの「状況」を中心にタラの七分類と中国語訳 13 パターンの分布を三つのラインでカテゴリー分類ができる。つまり、A ラインに「[仮定]→[反実]」、C ラインに「[p 事実]」、D ラインに「[習慣]→[契機]→[発見]」となる。

<sup>4</sup> 石川ほか(2010: 245)によると、コレスポネンス分析はデータの表の行や列に含まれる情報を少数の成分(次元)に圧縮し、それらの関係を散布図上に布置することで、視覚的なデータの俯瞰が可能になる。コレスポネンス分析の主な目的はデータの合成や分解ではなく、カテゴリーの整理と分類そのものにあるとされている。

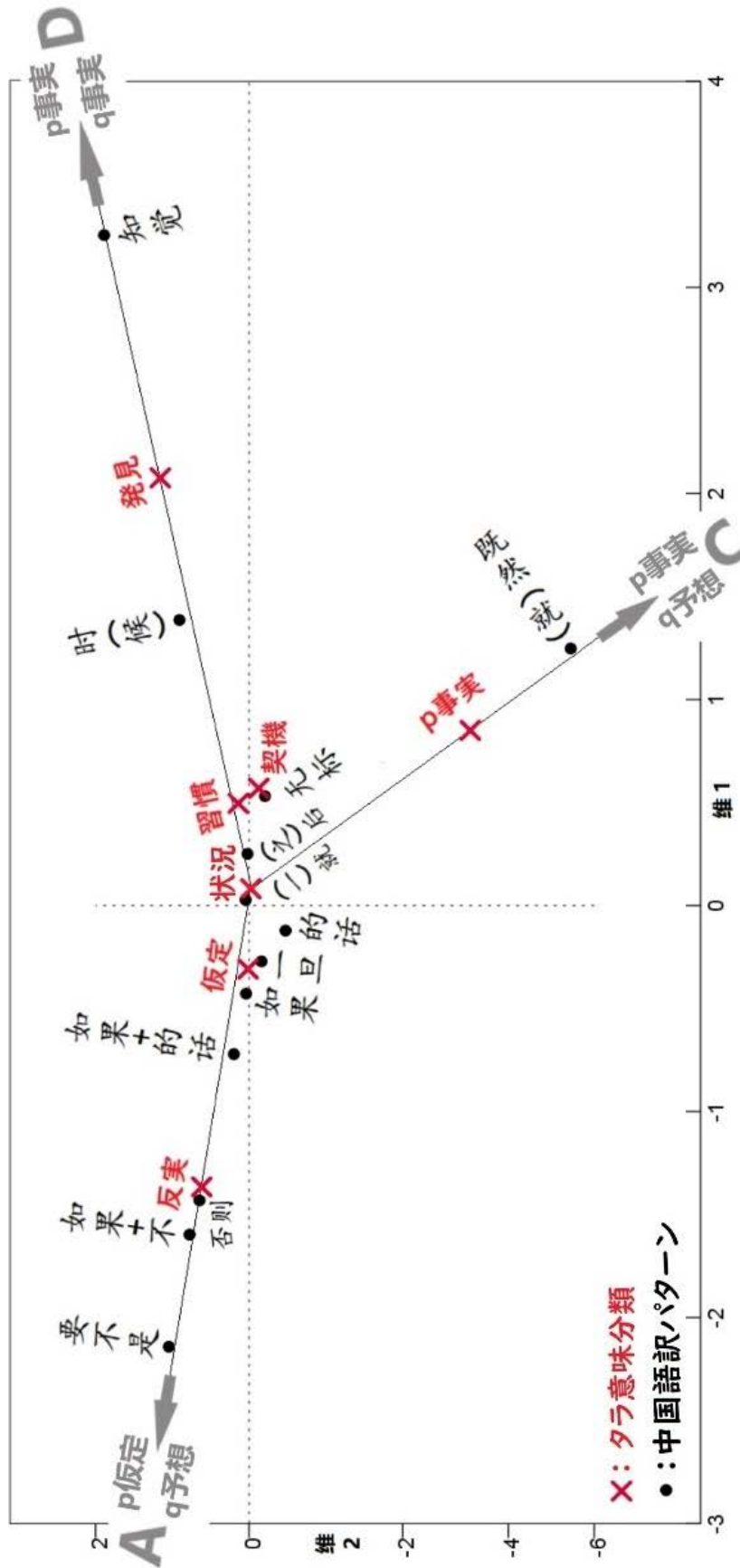


図2：タラ形式日中対訳例の相関係数分析図

### 4.3 日本語教育及び日中翻訳への応用

図 2 に示される A・C・D 三つのカテゴリーを大原則に、共起ネットワーク分析の六グループ(図 1 の実線部分のみ)の情報を併せて表すと次の図 3 のようになる(両者の共通する部分のみを描いた図)。図 3 は簡単明瞭かつ一目瞭然で、もっとも典型的な対訳パターンであるので、初級レベルの日本語学習者への教育に向いていると言えよう。つまり、グループごとに翻訳傾向が最も強い中国語訳パターンを教えることができる。

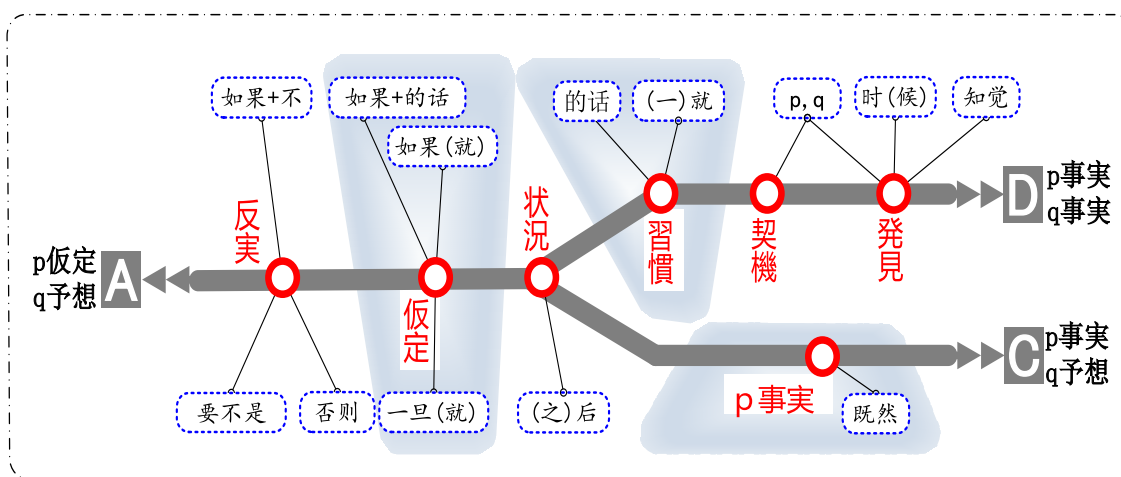


図 3: タラ形式の共起ネットワークとコレスポネンス分析の共通点一体図

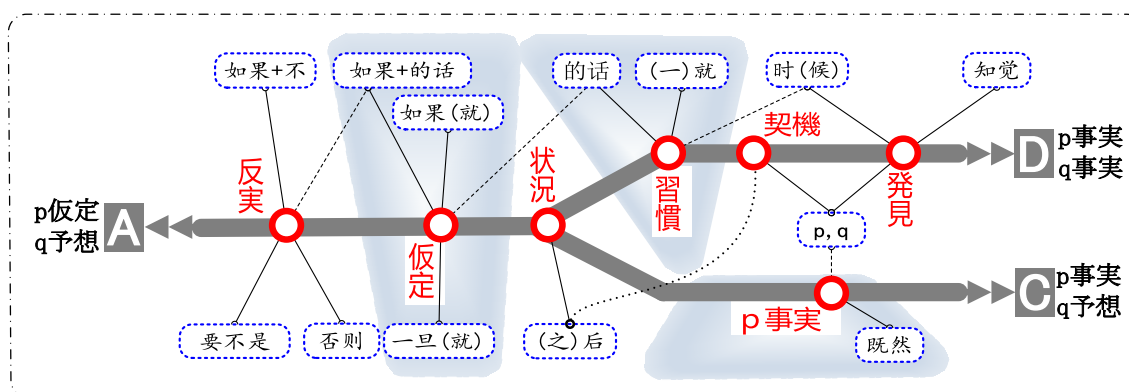


図 4: タラ形式の共起ネットワークとコレスポネンス分析結果の 2in1 一体図

図 3 を基に更に図 1 での破線部分の情報も書き込んで作ったのが図 4 であるが、少し複雑で見づらいものの、中上級レベルの日本語学習者向けの学習パターンであると言えよう。また、タラ形式の意味分類のグループ分けを基準に、グループを超えて対応している対訳関係(図 3 にはなく図 4 にしかない破線のペア、図 1 での破線部分と同じ)はこれから日中対

照研究などに問題点を示唆したりするので、日中翻訳研究に役立つし、定量研究のビジュアル化で日中翻訳指導にも応用できる。

## 5. おわりに

膠着語である日本語と孤立語である中国語は文法的・意味的に一対一に対応するものではない。タラ形式もその中国語訳パターンが必ず条件表現で表すとは限らないということは当然のことであると言える。しかし計量的な方法で得られたこれらの中国語の翻訳パターンはタラの中国語訳として信頼度が高い表現であると言っても過言ではない。例えば“知覚動詞”，“时候”と“之后”などは中国語では複文形式ではないものの、タラ条件文の「発見」と「状況」の中国語訳として一番典型的な形式であることは間違いないと言えよう。

体系が異なる言語間の対照研究は難しいものの、対訳本のビックデータを関数検定解析することにより、両言語間の対応関係の仕組みが簡単に構築できるようになっている。翻訳理論研究などでは直訳・意識・他訳・誤訳などが云々されてきたが、本稿のように、まずビックデータに基づく翻訳体系図を作った上で、直訳・意識・他訳・誤訳だと判定する理由を理論的に研究する必要がある。対訳ビックデータの解析でその対訳傾向の結果が分かればその原因を探るのも両言語の理論的対照研究への近道であると言えよう。つまり、終着点(結論)が分かれば辿るべき近道(理論研究の方法)が見えてくる。それにより、従来の理論研究での問題点を見つけることもできる。こういった観点と本稿での分析結果からすると本稿の意義を以下の三点にまとめることができる。

- 1) 翻訳家による翻訳は、小説全体の文脈を把握した上での翻訳専門家による訳文であり、一般人の翻訳よりは遥かに信頼度が高いものであると言える。
- 2) 何十人の翻訳家たちの訳文データを科学的計算方法で測るので、正確さがきわめて高く、信頼できる翻訳傾向であると言える。
- 3) 従来の言語学理論研究は学者たちの恣意性が込められているかもしれない。つまり、自然言語の仕組みが必ずしも正しく反映されているとは限らないといった問題点も、本稿のような計量方法で検証できる。

付記:本稿は、中国国家社会科学基金「日漢条件句目標語型和源語型翻訳共性研究」(研

究代表者:李光赫, 課題番号:18BY230), 及び JSPS 科研費(若手研究)「中国人日本語学習者の習熟度別作文コーパス構築及び母語転移に着目した習得実態の研究」(研究代表者:趙海城, 課題番号:19K13242)の研究成果の一部である。本稿は, 計量国語学会第 63 回大会(於国立国語研究所)での口頭発表に加筆・修正をしたもので, 発表の際に席上の方々から貴重なご意見とご指摘をいただき, 心より感謝している。また, 本誌への投稿にあたり, 玉岡賀津雄先生からとても有意義且つ貴重なコメントとご指導をいただき, この場を借りて御礼申し上げます。

### 【参考文献】

- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』東京:くろしお出版。
- 石川慎一郎(2012)『ベーシックコーパス言語学』東京:ひつじ書房。
- 鄒善軍・李光赫(2014)「日中対訳から見るタラ条件文の実証的研究」『研究会報告(連語論研究Ⅲ)』36, 182-194. 日本語文法研究会編。
- 日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6(第 11 部複文)』東京:くろしお出版。
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『条件表現(日本語文法セルフマスターシリーズ7)』東京:くろしお出版。
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析』東京:ナカニシヤ出版。
- 前田直子(2009)『日本語の複文』東京:くろしお出版。
- 李光赫・鄒善軍(2016)「関数検定から見るタラ条件文の中国語訳傾向」『連語論研究VI(研究会報告 40)』113-123. 日本語文法研究会編。
- 李光赫・趙海城(2018)「関数検定から見るタラ条件文の中国語訳戦略研究」『明星国際コミュニケーション研究』10, 15-28。

李 光赫 - 大連理工大学 外国語学院・副教授

趙 海城 - 明星大学 人文学部・准教授



## Visualization of Japanese-Chinese parallel translation system of *tara* conditional sentence focusing on 1000 *tara* conditional sentences from 100 modern novels

LI, Guanghe

Associate professor, School of foreign languages, Dalian University of technology, Dalian, China, E-mail: liguanghe5588@outlook.com.

ZHAO, Haicheng

Associate professor, School of Humanities, Meisei University, Tokyo, Japan, E-mail: zhcjp@ge.meisei-u.ac.jp.

### Abstract

This thesis aims to create a systematic diagram that visualizes the Japanese-Chinese parallel translation tendency of *tara* conditional sentence by statistical analysis. In other words, this thesis is based on 1000 *tara* conditional sentences from 100 modern novels in Japan and their Chinese translations. After visualizing the corresponding relations between 7 semantic classifications of *tara* conditional sentence and 13 Chinese translation patterns by network analysis and correspondence analysis, a systematic diagram combining these two types of information was created. As for the significance of this thesis, it can be summarized in the following two points. (1) From the standpoint of Chinese translation, the semantic classification of *tara* from I to VII is divided into six groups. The tendency of the Chinese translation for each group is clear, which is useful for Japanese language education and Japanese-Chinese translation research. (2) From the standpoint of facts and assumptions, classifying the preceding and following sections into A, C, and D is conducive to teaching the logical relationship of conditionals.

Keywords: *tara* conditional, semantic classification, Japanese-Chinese parallel translation, visualization

